

第1研究部

令和8年度 研究主題

自ら体を動かして遊ぶことを楽しむ幼児を育てる

幼児期は、運動機能が急速に発達し、いろいろなことをやってみようとする意欲が高まる時期である。そして、様々な遊びの中で、多様な動きに親しむことは幼児期に必要な基本的な動きを身に付ける上で大切である。

しかし近年、社会環境や生活様式の変化により、幼児にとって遊ぶ場所や時間が減少し、日常的に体を動かして遊ぶ機会が少なくなっている。

そこで、本研究部では、意欲をもって、自ら体を動かして遊ぶことを楽しむためには、どのような教師の教育的意図をもった働きかけが大切であるのかを探っていきたい。

研究園 伝法 三先 姫島 野里 大和田 西中島 田川 新高 菅南
滝川 中大淀 桜宮 西野田 貫江田 海老江西 鯉江 城東

第1回 研究部会 令和8年5月20日（水） 会場：伝法幼稚園

- 内容
- ・研究の取組について
 - ・自己紹介
 - ・各園の取組について意見交流
 - ・講話

講師 大阪市総合教育センター

教育振興担当 基本研修グループ 指導主事

研究の取組について

○幼児が体を動かして遊ぶことを楽しむ姿から、興味をもつきっかけや、体を動かす心地よさを味わい「もっとやりたい」という意欲につながっていく過程を読みとる。そこから、幼児が自ら体を動かしてみたいくなるような教師の教育的意図をもった働きかけを探っていきたい。

○幼児は様々な動きを経験し、繰り返すことで身に付いていく。生活や遊びの中で、幼児が多様な動きを経験できるよう工夫していくことが大切である。幼児が多様な動きを経験して楽しむことから、どのようにして自ら体を動かして遊びたいくなる意欲につながっていくのか、その過程についても探っていきたい。

各園の研究の取組について

- 幼児教育要領の領域「健康」を全員で読み解き、考える機会をもつ。
- 幼児の姿を丁寧に読みとり、日常の身近な遊びや生活の中で多様な動きを経験し、体を動かして遊ぶことを楽しめるような仕掛けを工夫していく。
- 一輪車や縄遊びなど、年上の友達が遊んでいる姿が刺激になり、やってみようとする姿がある。異年齢の友達との自然な関わりや友達の姿が見える環境を工夫する。



講 話

講師 大阪市総合教育センター 教育振興担当 基本研修グループ 指導主事

- 幼児期は、運動機能が急速に発達し、「やってみたい」という意欲が高まる時期である。遊びの中で多様な動きに親しむことが幼児期に必要な基本的な動きを身に付ける上で大切であり、主体性の育ちにもつながる。幼児が「やってみたい」と感じられる環境づくり、言葉かけが重要である。
- 近年は、3つの間と言われる「空間」「時間」「仲間」が減少し、日常的に体を動かす機会が少なくなっている。そのため、教師には、教育的意図をもって環境を構成したり、子どもの気持ちが動くような言葉かけをしたりすることが求められる。
- 幼児期の「遊びを通した学び」が、小学校低学年の「運動遊び」へとつながっている。遊びを通して、できた喜びや楽しさを感じる経験が、生涯にわたって運動に親しむ基礎になる。
- 幼児の実態や変容を丁寧に捉え、遊びや体験の積み重ねにより多様な動きを経験していくことで、基本的な動きの獲得、主体性や意欲が育つということを意識して、明確なねらいをもちながら教育的意図をもった働きかけをしていくことが大切である。



学んだこと

- 幼児が多様な動きを経験するためには意欲が大切であると話し合った。幼児がやってみたいと心が動かし、体を動かして遊ぶことの楽しさを味わえるように、明確なねらいをもって教育的意図をもった働きかけを工夫していきたい。
- 幼稚園教育要領に基づき、育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）などについても理解を深め、小学校教育とのつながりを意識しながら保育をしていくことの大切さについても再確認した。